

和風住宅に見られる「中廊下風小部屋」の起源に関する一考察

濱田 耕平

1. 研究の背景と目的

近世以降の和風住宅を俯瞰すると、來住家住宅^(大正)(図1)や目加田家住宅^(18世紀末・19世紀)(図2)のような、家屋の中央に細長い部屋(以下「中廊下風小部屋」と仮称する)を持つ平面が散見される。これらの平面に関しては十分な分析はなされておらず、現行の大方の理解では西洋住宅文化の影響を受けた中廊下、あるいは近代以前の事例については日本独自の中廊下の萌芽とみなされているようである。⁽¹⁾つまり、明治以降の西洋文化導入の動きや封建制崩壊後現れた家族本位への住意識の変化が生んだ近代的中廊下住宅の範疇に位置づけられている。それに対し、本稿では「中廊下風小部屋」を寢殿造から書院造、そして書院造の変遷における塗籠(納戸)と広間(座敷)の関係の中で捉えられるものと考え、以下この見解について概説する。

分析に入る前に本稿の構成を概述しておく。第二章では來住家と目加田家の平面構成の類似と相違点を挙げ、來住家→目加田家という変遷の可能性を検討する。次に、初期書院造の典型である聚楽第大広間図の平面と來住家・目加田家の平面との共通点から、初期書院造の発展として捉える視点を提示する。続く第三章では、「中廊下風小部屋」と座敷の床の位置関係に着目し、同様の平面的特徴を持つ犬養家住宅との比較を通じて來住家住宅に至るもう一つの変遷過程を検討する。二章、三章の結果から、「中廊下風小部屋」を書院造の変遷の中に位置づけることが妥当であることを確認し、その上で近代以降の住宅の理解に対する新たな視点を提示し結論とする。

2. 「三列構成」型(聚楽第型)としての理解

まず、目加田家と來住家の「中廊下風小部屋」を比較しつつ、両者と初期書院造の関係性を確認する。

目加田家の平面構成については以下の通りである。全体の構成としては南西に面するa(座敷)・b(次の間)・c(玄関の間)及びア(玄関)、北東に面するd(五畳の間)・e(裏座敷)・f(四畳の間)、そして東側の土間・台所・板の間・中の間・中間部屋からなり、c(玄関の間)とf(四畳の間)の間に階段室を設ける。a・bと

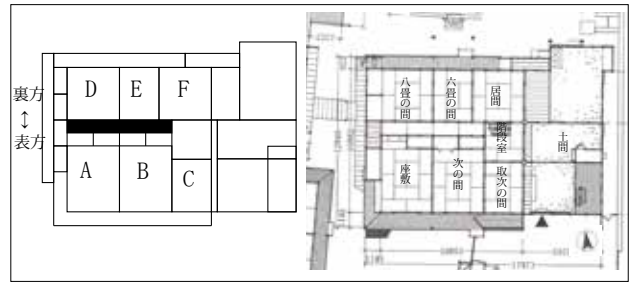


図1 來住家住宅平面

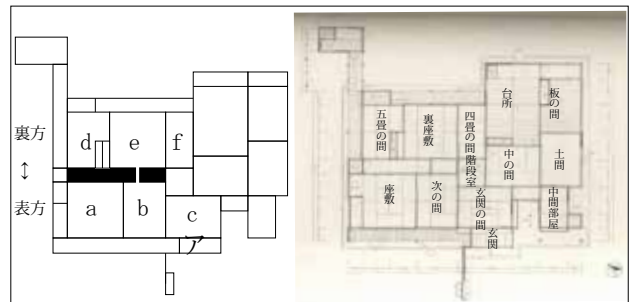


図2 目加田家住宅平面図

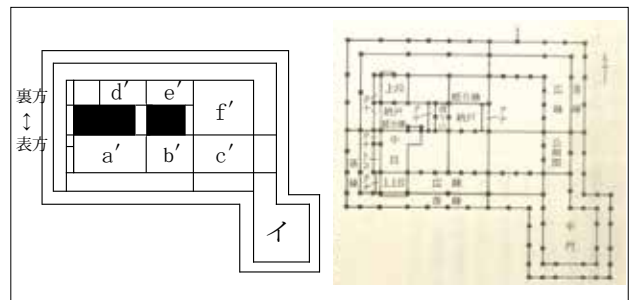


図3 聚楽第大広間平面図

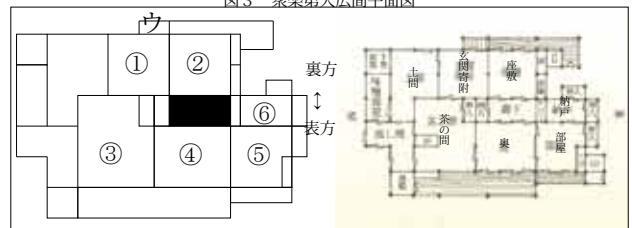


図4 高遠藩中級武士平面図

d・eの間には二室に分かれた「中廊下風小部屋」を挟む。表方部分についてみると、a(座敷)は床と違棚を持ち、それらは次の間に正対するよう配される。そして、c(玄関の間)の南西にはア(玄関)を設ける。次に來住家住宅についてみると、南面してA(座敷)・B(次の間)・C(取次の間)、北面にD(八畳の間)・E(六畳の間)・F(居間)、東側に土間を設け、C(取次の間)とF(居間)の間に階段室を設ける。さらに、A・BとD・Eの間には「中廊下風小部屋」を配置する。

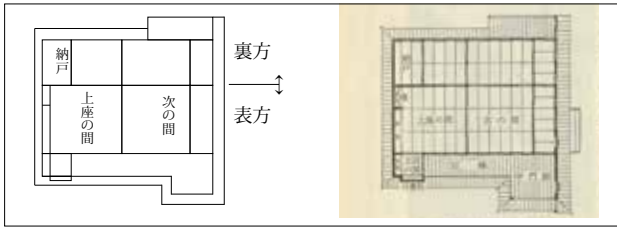


図5 園城寺光浄院客殿平面図

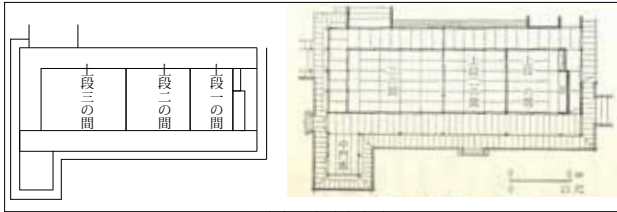


図6 醍醐寺三宝院表書院平面図

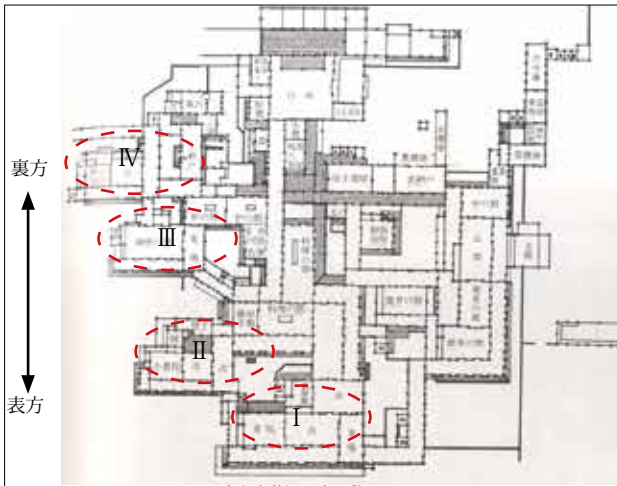


図7 宇和島藩江戸中屋敷平面図

目加田家住宅と來住家住宅の類似点を挙げると以下の通りである。両宅は東側に作業空間である土間・台所を配する（中間部屋も含む）。そして、「中廊下風小部屋」を軸に、a(座敷)・b(次の間)・c(玄関の間)は、A(座敷)・B(次の間)・C(取次の間)に対応する。これらは表方機能を担う部屋である。d(五畳の間)・e(裏座敷)・f(四畳の間)は、D(八畳の間)・E(六畳の間)・F(居間)に対応する。これらは裏方機能を担う部屋である。つまり、両宅は「中廊下風小部屋」を挟んで南に公的諸室、北に私的諸室を配する。

ここで、両宅のような平面は一見したところ西洋的中廊下にも見えるが、似て非なるものである。即ち、西洋的中廊下は玄関に接続し、その両脇に独立性の強い諸室を配するのが一般的である⁽²⁾。その様は、屋外の道路に個別住宅が並ぶ姿を彷彿させる。それに対し、両宅の「中廊下風小部屋」は玄関とは直結せず、表方の部屋と裏方の間に挟まる緩衝地帯、つまり、前室のような機能を果たす。

次に両宅の「中廊下風小部屋」の違いについてみると、目加田家のものは東西が壁で仕切られ、東側の部位はb(次の間)とe(裏座敷)専用の前室機能を持つ。一方、來住家のものは仕切りを持たない。形式的に見れ

ば目加田家のものが先行タイプと考えられる。つまり、仕切り壁を撤去したタイプが來住家である。

この理解が妥当ならば、來住家の前身形と考えられる目加田家はどのように位置づけることができるか。そこで想起されるのが聚楽第大広間(図3)である。目加田家と聚楽第の対応関係を見ると、a(座敷)・b(次の間)・c(玄関の間)・d(五畳の間)・e(裏座敷)・f(四畳の間)は、それぞれa'・b'・c'・d'・e'・f'に対応する。また、目加田家の式台アは聚楽第の中門廊下に相当する。そして、聚楽第にも目加田家と同様、表方の部屋a'・b'と裏方の部屋d'・e'の間に「中廊下風小部屋」が介在する。しかも、「中廊下」内には仕切りがあり、東側部分がb'とe'専用の前室の機能を果たす点は目加田家と酷似する。

聚楽第の「中廊下風小部屋」は周知の通り、寢殿造から書院造の変遷の中で、塗籠が実質的機能を失い形骸化しながらも権威的装置に昇華し、継承された姿である。この平面は、表方諸室、塗籠(納戸)、裏方諸室が並列する「三列構成」型を成す。これに鑑みれば、目加田家の「中廊下風小部屋」は聚楽第の塗籠の形骸化がさらに進み、幅を一間から半間に狭めつつも生き残ったものと理解できる。さらに、高遠藩中級武士住宅(図4)に見られる「中廊下風小部屋」の事例は、その幅に注目すれば、聚楽第と目加田家の中間過程に当たるものとも考えられる。即ち、その平面は表方部分の①玄関寄附(次の間の機能を兼ねる)・②座敷と、裏方部分の③茶の間・④奥・⑤部屋(④よりもさらに奥向きの部屋と考えられる)・⑥寢所からなり、表方の②と裏方の④の間に一間幅の「中廊下風小部屋」を設ける点は、目加田家や聚楽第と共通する。

なお、「三列構成」型(聚楽第型)は江戸期の早い段階で主流からは後退していき、園城寺光浄院客殿(図5)に見られるような「中廊下風小部屋」を廃した表方諸室と裏方諸室による「二列構成」型、さらには醍醐寺三宝院(図6)・宇和島藩江戸中屋敷(図7)のような裏方諸室(寢所を含む)を雁行型に分棟した(図7)のⅠ→Ⅱ→Ⅲ→Ⅳ表方諸室のみの「一列構成」型が支配的になる。つまり、二列構成や一列構成に主流が移りつつも、聚楽第大広間のような初期の構成が一定程度残り、目加田家や來住家に発展したと考えられる。

以上、來住家・目加田家及び聚楽第大広間に共通する三列構成に着目し、「中廊下風小部屋」を寢殿造から書院造、そして書院造の変遷の中に位置づける見方を提示した。さらに高遠藩中級屋敷を事例に取り上げて、この見方を補強した。そしてこれらは、三列構成

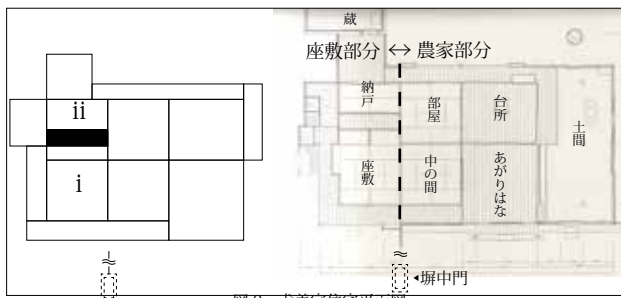


図8 犬養家住宅平面図

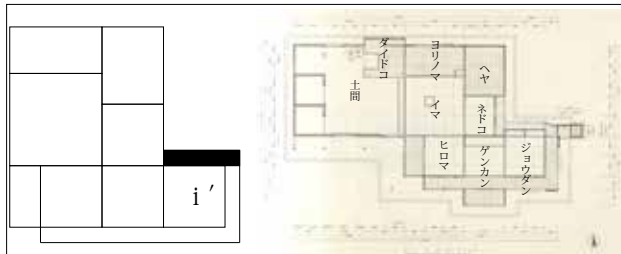


図9 入野家住宅平面図

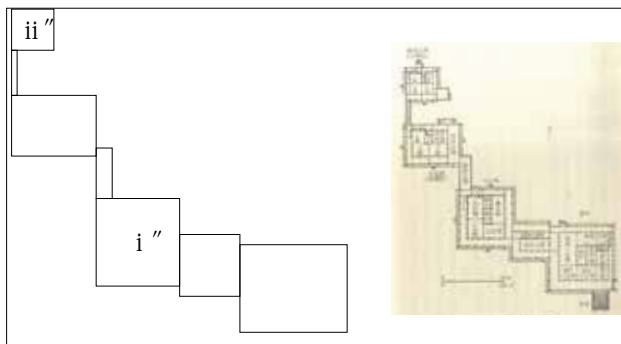


図10 二条城二の丸書院平面図

から二列構成・一列構成へと変化する書院造の潮流の中で、初期の形式も一程度根強く残り、独自の発展を遂げた可能性をも示すものである。

3. 「雁行分棟型」の圧縮再編型としての理解

ところで、來住家の床の位置に注目すると、床が二つあり、その一つの真裏に「中廊下風小部屋」、それを挟んで寢所(納戸)がある。床の裏手に小部屋と寢所(納戸)を配するタイプには、犬養家住宅(図8)など類例が散見され、これらについては「三列構成」型(聚楽第型)とは少々異なる理解も可能である。具体的には、書院造の「雁行分棟型」の圧縮再編型と理解することも可能と考える。以下、これについて概説する。

まず、犬養家住宅の平面構成を以下に記す。犬養家住宅の平面構成は、東側部分の農家型四室構成に西側部分の座敷及び納戸を付加したものと理解できる。まず農家部分は、東側の土間に面して板敷の台所とあがりはな、その西側に部屋と中の間が付いた四室構成である。そして西側の座敷部分については、床・脇床・付書院を持つ座敷飾を備えた i (座敷)と、床の裏に寢所に充てられたと考えられる ii (納戸)を配する。そして、この納戸と座敷の間には板敷の押入が付く。南側

の庭には、i (座敷)と中の間を仕切る位置に塀中門が設けられており、公私の機能分離を意識しているようである。南縁は西縁に続き ii (納戸)の横まで通る。土間に面した台所の板敷は建物裏手の縁へ接続している。また北西には板敷の間を挟んで蔵を設ける。

ここで、犬養家の前身形と考える入野家住宅(図9)のような角座敷型の例を挙げる。入野家の場合、廻縁が角座敷の裏側にもまわる。これを犬養家の座敷周りと照応すると、犬養家のものは入野家の角座敷の背面に寢所(納戸)を配したタイプと理解できる。入野家のような角座敷は中小クラスの武家住宅や武家身分兼帯の豪農住宅に散見されるプランである。いま仮説的に、中小クラスの武家や豪農層がより上級の権威性を求めて、大名・大身旗本邸宅の象徴的形式である宇和島藩江戸中屋敷(図7)や二条城二の丸御殿(図10)のような雁行型分棟形式に関心を示したと考えてみる。その場合、中小クラスの武家では経済的制約の面で、幾重にも連なる分棟形式は採りづらい。また最上級武家にも匹敵する身代の豪農では、経済的制約の問題はなくとも身分的制約から、分限を逸脱した幾重もの雁行型分棟形式は採りづらいと考えられる。そこで、雁行型分棟形式を圧縮して最奥に位置する寢所(図10の ii''')を広間座敷(図10の i''')の背後に配し一棟型の中にコンパクトにまとめたと理解してみてもどうか。つまり犬養家の「中廊下風小部屋」は、入野家のような廻縁を持つ座敷の背後に雁行型分棟形式の圧縮操作によって寢所を付加する際、裏縁がそのまま取り込まれたタイプと理解することもできる。

以上、來住家住宅の座敷の脇床とその裏に寢所及び「中廊下風小部屋」が位置する点に着目し、中下級武士や豪農に見られる角座敷型平面と二条城二の丸御殿タイプの書院造との重ね合わせから、「雁行分棟型」の圧縮再編型の可能性を示した。即ち、中下級武士と豪農の住宅は共に、大名・最上級旗本邸宅の形式である雁行型分棟を志向しつつも経済的制約や身分的制約が足枷となり、広間(座敷)と最奥空間である寢所(納戸)を一棟にまとめる形に留まった。そして、その過程で縁が取り込まれた際に、犬養家の形式が生まれ、來住家住宅に発展したと考える。

4. 結論及び展望

以上、目加田家・來住家のような「中廊下風小部屋」について、これらの起源を「三列構成型」(聚楽第型)と「雁行分棟型」の圧縮再編型と捉え、概説した。この二つのタイプの片方による理解が妥当なの

か、あるいは両方の系譜が併存していたと見るのが妥当なのかはわからない。しかし、いずれの場合においても「中廊下風小部屋」は、寝殿造から書院造、そして書院造の変遷における塗籠（納戸）と広間（座敷）の関係の中で理解すべきものとする。まずは、ここまでする結論である。

そして、この結論が妥当ならば、近代和風住宅の捉え方や18世紀後期及び日清日露戦後の復古熱の問題に対しても新たな留意が必要となる。

例えば、近代和風については江戸期書院造住宅に新たに洋風要素を足し算的に付加したものとみる理解が一般的だが、江戸時代初期段階で既に非主流となっていた「三列構成」型（聚楽第型）が大正7年建設の來住家に採用されている点に注目した場合、近代和風が洋風要素を付加する基軸を持つ一方で、それとは真逆の本邦の古典的様式を採求・再編する基軸をも同時に併せ持っていた様子がうかがえる。この現象は日清日露戦争以後の自国文化を再評価する当期の社会全般の動きとも重なるものがある。

また、目加田家についていえば、現存建物とは異なる「二列構成」型の草案図（図11）の存在が確認されており、⁽³⁾結果的に目加田家は古式を選択したことになる。この二枚の古図は、式台及び表座敷の間取りがほぼ同形である点、土間の背後に台所を設ける点における目加田家住宅と類似性や、三基のかまどを一間に中に配するという一般の農家には見られない形式などから、目加田家建築の際の平面計画古図と推定される。すでに形骸化していた納戸を除いた「二列構成型」の計画案から旧式である「三列構成型」の実施案への変化には古式への志向性が窺える。

目加田家住宅が建設されたと推定される18世紀末から19世紀初期は巨大帝国清朝の実力が大量の文物の流入により目の当たりとなり、復古熱を強く帯びた時期である。この復古熱への反応の一つとして目加田家を

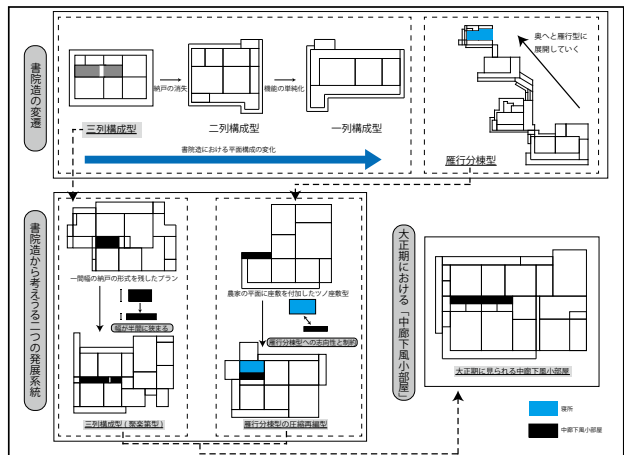


図11 「中廊下風小部屋」の変遷モデル

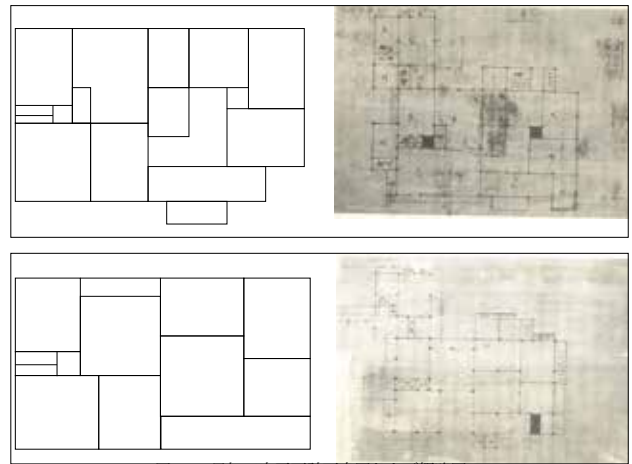


図12 目加田家平面計画古図および概略図

評価することもできる。

さらに、昭和10年～12年建築の安部邸（現福寿会館）の和館広間座敷には園城寺光浄院や法然上人絵伝に見られるような出文机が付く。出文机は江戸初期の段階ですでに主流から外れ、代わりに付書院が一般的になる。その点に鑑みれば、福寿会館の例は極めて強い復古色をうかがわせる。よって、今回扱った塗籠（納戸）と広間（座敷）の関係や福寿会館にみられるような出文機の採用だけでなく、その他にも近代和風住宅では古典的様式の拾い上げと再編が見られる可能性がある。

近代和風住宅は江戸時代末期・明治時期段階の和風住宅に西洋的要素を単純に足し算的に加味したものではない。外的刺激の下での自国文化の再定義という観点から捉え直す必要がある建築的潮流である。

【注釈】

- (1) 特に來住家住宅や目加田家住宅は修理工事報告書などでも中廊下と評価され、來住家住宅については中央の畳敷きの中廊下は近代的な特徴とされている。
- (2) 近代的な中廊下についての研究は木村徳国や内田青蔵などの研究が知られる。形態的には共通して玄関から伸びた廊下、及び各室の機能分化が特徴として挙げられる。
- (3) 目加田家住宅修理工事報告書によると、襖の当初のものと思われる下貼りの中から、部分的な小紙片一枚と本稿で扱った平面全体の記された二枚の計三枚の住宅の平面図が発見されている。この古図については現存平面に各部が対応する点や、襖の裏張りから発見されたものである点などから、目加田家住宅の平面計画古図としての評価は信頼性は高い。

【参考文献】

- ・木村徳国『日本近代都市独立住宅様式の成立と展開に関する史的研究』第二章「明治時代の住宅改良と中廊下形住宅様式の成立」（1959）
- ・宮崎信行 青木正夫「明治10年代の我が国住宅の衛生面を改良する計画論上の試み衛生面からみた住宅の平面計画に関する史的研究 その1」、「明治20年代の我が国の家政教育分野における住宅の衛生面を改良する計画論上の試みについて 衛生面からみた住宅の平面計画に関する史的研究 その2」、「明治30、40年代の我が国における家族居室の南面配置をめぐる計画論上の試みについて 衛生面からみた住宅の平面計画に関する史的研究 その3」、「大正初期の我が国における家族本位計画論の成立について」
- ・大岡敏昭「武士住宅の配置・平面原理 都市独立住宅の配置・平面原理に関する計画史的研究(その1)」
- ・洪沢敏三『明治文化史 12 生活編』（洋々社 1955）
- ・内田青蔵『日本の近代住宅』
- ・大岡敏昭『江戸時代日本の家』
- ・西山卯三『すまい考今学』

【図版出典】

- 以下の史料より抜粋し筆者による加筆を行った。
- 図1 兵庫県教育委員会『兵庫県の近代和風建築』 2014
- 図2、11 文化財建造物保存技術協会『目加田家住宅修理工事報告書』 1979
- 図3、図5、図6、図10 太田博太郎『日本住宅史の研究』 1984
- 図4 大岡敏昭『江戸時代日本の家』
- 図7 平井聖 鈴木解雄『日本建築の鑑賞基礎知識-書院造から現代住宅まで-』
- 図8 文化財建造物保存技術協会『犬養家住宅修理工事報告書』
- 図9 文化財建造物保存技術協会『入野家住宅修理工事報告書』